SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

イングリッシュ・ペイシェント

１９９７（平成９）年５月鑑賞

Data

監督：アンソニー・ミンゲラ
出演：レイフ・ファインズ／クリスティン・スコット＝トーマス／ジュリエット・ビノシュ／ウィレム・デフォー

みどころ

アカデミー賞は当然。「風と共に去りぬ」と並ぶ名作。
しかし少し難しいよ。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

＜世紀の超大作と並ぶ傑作＞

この映画は、予告編を観た時からすごいと思った。スケールの大きさもそうだし、私にはいつものことだが、人妻「キャサリン」を演じる、クリスティン・スコット＝トーマスの魅力。予告編で見せる、上品だがちょっと過激なセックスシーンだけでも、「これは絶対観なきゃ」と思ってしまった。

「イングリッシュ・ペイシェント」とは、日本語に直訳すれば、「イギリス人の患者」。同名の翻訳本がこの映画の原作となっているものだ。もちろん、「イギリス人の患者」というタイトルだけでは何のストーリーか全くわからない。そして、映画を観ても、あの名作「アラビアのロレンス」と同様、第２次世界大戦当時の北アフリカの戦況、そしてイギリス、ドイツ、イタリアなど各国の力関係や、位置関係がわからなければ、十分に理解することは難しい。しかし、そのような歴史的背景の理解が多少不十分でも、戦争という大きな激動の中でのラブ・ストーリーの素晴らしさは、十分に堪能できる。

映画の冒頭は、何やら壁画らしきものをカメラでたどっていく。暗示的な悩ましい曲線を描くのは、アフリカの砂漠。そして、一面に広がる砂漠の中で、飛行機が撃墜される。重傷を負った、主人公の「イングリッシュ・ペイシェント」は、この後、本当にドラマティックな人生を送ることになる。冒頭の暗示的な美しいシーンは、人妻キャサリンの美し

い肉体であり、また彼女が死を迎える洞窟の壁画であることが、最後になってやっとわかる。

　昔観た「誰がために鐘は鳴る」や「風と共に去りぬ」などと並ぶ、名作中の名作である。アカデミー賞１２部門にノミネートされ、作品賞、監督賞、そして助演女優賞など、９部門を受賞した、１９９７（平成９）年度の、間違いなく最高傑作である。

２００１（平成１３）年9月記